
花暦

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花暦

【Nコード】

N8933K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

僕は高校3年生で、彼女に出会った。

僕はやっと一人の生活に慣れてきた。

君はスーパーの袋を折りたたみ、紙袋は押入れに畳んで入れている。使い古された歯ブラシは、靴や台所のシンクを洗うようにいろいろなところにあつた。

君は29歳。僕より6歳上。

彼女は僕の高校の新任教員としてやってきた。柳川エリカ。彼女は大学を通信制で卒業したという異色な先生だった。時間はかかったという彼女の話は、僕の心にストンと落ちた。彼女は社会の教師だった。みんな授業は、結構ノートも頑張つて書いていたから、彼女は喜んでノートにも一言書いてくれていた。

僕は家ではほとんど話さなかった。父は忙しいと言って朝早くから夜遅くまで帰つてこないし、母は実家のレストランを手伝っていた。レストランは学生に人気のある店で、値段が安く有名だった。だが祖父が脳梗塞で倒れて、祖母だけではどうにもならなかった。一人娘だった母は手伝いに入ると、今まで外で働いたことがなかったため、必死で働いた。すると、レストランも新しい雰囲気加わり、客層が広がったのだ。母は仕事が楽しくなり、息子や夫の帰りを待つだけの生活より生きる目標ができたかのようだった。

僕は反抗期というより、一人っ子でいつもそんな母親の愚痴に辟易していたから、母が働くことは全然オーケーだった。むしろ、いきいきと輝いていく母を見るのは嬉しかった。

だが、両親が遅くなると、当然僕の家での時間は静かすぎて、物足りない気になっていた。塾へ通う前の食事は、母の料理を温めるだけでできたが、美味しさも半減して行った。友達はたまに来ると羨ましがったが、僕は一人の食事に飽きていた。

そこで、塾の前にはその近くのコンビニでパンや弁当を買うようになった。その方がまだ人の間に身を寄せている気がした。いつものように、パンを探していると、彼女がいた。

「先生」

「あら、結城君、買い物？」

「ええ、これから塾へ行くので腹ごしらえのパンを探してます」

「そう、大変ね。これ美味しいわよ」

「ああ、そうですね。僕もそのサンドイッチ好きです。先生は？」

「ふふ、ばれちゃったか」

「作らないの？」

「だって、独り者だからこの方が安い。週末しか作らないわ」

「そうか」

「何時からなの」

「6時半です」

「あと30分ね」

「はい」

「じゃ、その公園で食べる？」

「そうですね。今日は暖かいし」

彼女は僕の話を楽しそうに聞いてくれて、あつという間に時間は過ぎた。彼女は節約するのは夏にヨーロッパに行きたいからと話してくれた。古城めぐりが子供のころからの憧れだそうだ。家族は母親が田舎で一人暮らしをしていると。

それ以来、コンビニで会うのではと期待して行くようになった。彼女は学校に遅くまで残って仕事をするから滅多に会えなかった。でも、たまに会うと一緒に食べるようになった。先生と生徒としてそんな僕らが変わったのは、僕が大学生になってからだだった。

僕は大学生になり、写真研究会に入った。サークルは面白くて彼女のことは忘れていた。そんなある日、偶然、僕たちは横浜の元町で出会った。いや、見つけたというべきだった。彼女は一人で買っている物をしてるようだった。僕は彼女を撮りたくなくて、持っていた

カメラで遠くから撮った。

彼女は中華料理用の調味料を手にとって、楽しそうに店の人に尋ねていた。フアインダーを通してみると、先生ではなくて、一人の若い女性としか見えなかった。

僕は彼女の前に出ていこうとした。すると、僕より先に彼女の前に行った男がいた。彼女は嬉しそうに腕を組んだ。もう、僕は前に行くことはできなかった。どう見ても恋人同士だった。

僕はがっかりしていたが、その人と歩く彼女の姿は可愛らしくて、やっぱり、もう一枚だけ撮ろうと思った。彼女は風が吹いてスカートがひらひらとめくりあがりそうになるのを、笑いながら押さえていた。それがとつても魅力的に映った。僕はその一枚を撮ると、帰ることにした。だが、その時、悲鳴が聞こえた。あのそばに立っていた男の後ろから、包丁を持った中年男が彼を刺したのだった。その上、次々と道歩く人を切りつけていた。彼女は叫びながら、彼に縋っていた。僕はあわてて彼女の方へ走り寄った。

逃げまどう人を追いかけて、男は捕まえられたようだった。

「先生！」

「ああ、どうしよう、英ちゃん。英ちゃあーん」

オロオロする彼女は彼の心臓に耳をつけ、早く救急車をと叫んだ。僕はケータイで連絡したが、誰かが通報してくれたようで救急車がやって来た。血があふれる彼の顔色は真っ青で、もう息をしてないように見えた。彼女と病院へ行くことになったが、震える彼女をどうすることもできなかった。彼は1時間後死亡が宣告された。彼女の悲鳴が病室から聞こえてきた。僕は絶望する彼女のそばに立っていると、彼の家族がやって来た。彼女を見つけると、母親と思われる人が、

「貴方のことを許さない！」

と言って、激しく彼女のほほを打った。夫と思われる人は妻を抱きしめて病室へ入った。後は声にならない慟哭が漏れてきた。彼女は病院を走り出て行った。

「先生。あなたは悪くない。何も悪くない」

僕がどんなに言っても、彼女は首を振って泣いていた。

彼女の母親は昔勤めていたところの社長の愛人で、彼女の素行調査をした彼の両親は猛反対していたという。それでも、いつかは理解してもらえると彼は付き合いを止めようとはしなかった。だが、こんな無差別殺人の犠牲者になってしまった。彼女は彼の葬儀にも行くこともできなかった。

半年後、写真を届けようと学校に向かった。彼女はひどく痩せていた。

「先生、大丈夫ですか」

「ええ」

「どうしようかと思ったけど、とても幸せそうな写真なのでお渡しした方がいいと思って」

そう言いながら渡した写真。彼女が彼のそばでスカートを押さえて笑ってる写真。彼もにこにこほほ笑んで何とも素敵な恋人同士の写真だった。彼女は写真を見つめると、ほほを伝う涙をぬぐおうとしないで、写真を抱きしめた。

「ありがとう」

あれから、2年後、僕らは恋人同士になった。

そして、今日は出産で田舎に帰っていた妻が1カ月ぶりに戻ってくる。

「エリカー、お帰り！ お袋が料理作って待ってるよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8933k/>

花暦

2010年10月8日14時13分発行